

Annual

B u l l e t i n

東海大学文明研究所所報 2013

Report

2013

現代文明研究と創業者



川野辺 裕幸

文明研究所所長
政治経済学部教授

本学の創業者・松前重義博士は、現代文明論を開講するに当たって書き下ろした著書の中で、現代文明のもっとも基本的な課題を、平和な社会を作ること、人種的平等を実現すること、階級対立をなくし貧富の差のない豊かな社会を作ることにあるとした（松前重義、1963、14-43）。そして、自然科学の発展が新しい世界観と歴史観を導くとの信念に基づき、現代を原子力時代と位置づけた。

博士は、原子力の可能性に期待しつつ、原子力戦争は全人類の破滅を導かざるを得ないことを指摘し、原子力はその平和利用に徹すべきであることを説いた。さらに人類の破滅を導く原子力戦争は、国の政治のあり方や政治の概念を根本的に変え、人類は当時の言葉で言えば「平和共存」、つまり互いの多様性を認め合いつつ共存する以外に現代文明の途はないとした。

そのうえで、現代文明は国際間の対立から一つの共同体の建設の方向へと向かっていくことをヨーロッパの経済統合への動きやアジア・アフリカ会議への発展途上国の参集を指摘した（松前重義、1963、212-219）。

当研究所は、こうした創業者の雄大な文明観、世界観を受けて、東海大学の文系の3つの研究所である旧「文明研究所」、「社会科学研究所」、「芸術研究所」を統合して2001年に再発足した。学際的・総合的見地から、文明の主体である人間とその行動の現れである生活を主軸として探求することを目的とし、その研究成果を調和のとれた文明社会の創造につなげることと定め、研究目標を「21世紀文明の創出」として、3年を1期とする研究プログラムを策定し研究を進めてきた。

第1期、第2期は、現代文明の特徴を研究する中から、その多様性を指摘し、次にグローバリゼーションをキーワードとして現代文明をとらえ、地域研究と国際的な研究連携を進めるなかで、多様性の内容を掘り下げてきた。これらの研究成果を踏まえて、第3期以降は、グローバリゼーションのもとで持続可能性のある社会を築いていくために、新たな構成原理として“対話と共生”のもとに現代文明が打ち立てられるべきであるとし、そのあり方を提言することに進んだ。

本研究所は、本年度2013年度で4期にわたる研究プログラムを終える。しかし、現代文明論の開講以来半世紀を経て、人類は依然として核爆発と戦争の脅威から免れていない。科学技術の発展はグローバリゼーションを促進させ、産業革命以来の人間の営為は環境破壊を激化させた。地球規模での人類の相互依存はさらに進んでいる。人類存立の途は創業者が看破した通り、多様性のもとでの共存以外にあり得ない。

現代文明の特質としておおかたの理解を得ることができると思われるものは、自由と人権が人間社会を構成する基礎であり、政治形態としての民主主義が選択されることであろう。20世紀末に生じた東欧諸国の市場経済化、アジアの主要社会主義国の市場経済の導入がそれをいっそう明確にし、以後一世代を経ても計画経済への回帰が起こっていないことがその重要な証左である。

他方で、自然科学の進歩は、原子力を超えて、核融合、再生可能エネルギーへと進んでいる。再生治療の発展も人類の将来を方向付けるかもしれない。EU統合やTPPの試みは相互依存環境の中で国家を超えた共存の方途をさぐるものである。各国が独自では存続し得ない現代文明の中で、“対話と共生”はまさに創業者が目指した共同体のあり方を問うものであった。

第4期研究プログラムのさなかにわが国は東日本大震災に直面した。被害を甚大にしたのは福島第一原子力発電所の事故であった。平和利用と安全性の確保を第一に主張した創業者の姿勢は、その後、備蓄が可能な燃料の確保、抑止力としての原子力発電所の保有という要請から、国是としての原子力発電の振興のもとに、ないがしろにされてきてしまったように思える。原子力の歴史的知見を超えた自然災害の猛威にわれわれはどう対応するのか、現代文明は不測の事態を乗り越える修復力を持っているのか。復興過程の精査は現代文明を問う格好の材料にもなった。

現代文明は刻々と形を変えつつ新たな局面を見せてきている。しかし創業者が提起した3つの課題は依然として現代文明の中心課題であり続けている。

参考文献

- 松前重義（1962）『科学の進歩とマルクス主義の崩壊：松前重義著作集第3巻』東海大学出版会
- 松前重義（1963）『現代文明論』東海大学出版会
- 松前重義（1964）『現代文明への課題：現代文明論・追補』東海大学出版会
- 松前重義（1965）「平和共存の歴史的意義」『文明』第5号：1-12.

文明研究所の研究プログラム

文明研究所は、本学創立者・松前重義の雄大な世界観を引き継ぎ、学内の幅広い分野からの研究者の結集を受けて、総合科学的な視点から現代文明のあり方を問う研究機関です。当研究所は、「21世紀文明の創出」という研究目標のもとに、3年を1期とする研究プログラムを策定して研究を進めています。

第1期「現代文明の展開と社会文化的多様性」（2001年度～2004年度）においては現代文明の多様性を指摘し、第2期「グローバリゼーションと生活世界の変容に関する総合的研究」（2005年度～2007年度）においては地域研究と国際的な研究連携を進めるなかで、グローバリゼーションの持つ意味を、人間の生活の変化という観点からとらえてきました。

これらの研究の積み重ねの上に第3期「対話と共生を理念とする新しい社会の構築」において“対話と共生”の観点から21世紀文明のあり方に対する積極的提言を目指しました。

2011年度からは第4期研究プログラム（2011年度～2013年度）を開始し、「創出すべき21世紀文明」の構成原理として第3期から打ち出した「“対話と共生”を原理とする新しい社会の構築」をさらに進めることとしました。本学の中期目標（2009年度～2013年度）における研究の目標には、「持続可能な社会の実現のため、研究の重点化を図り、戦略的な研究分野を確立する」と謳われています。本研究所は、グローバリゼーションのもとで持続可能性のある社会を築いていくためには、新たな構成原理として“対話と共生”のもとに現代文明が打ち立てられるべきであると考え、そのあり方を提言していきます。

文系研究所の沿革

- 1959年 文明研究所設立（初代所長 原田敏明）
- 1964年 基礎社会科学研究所設立（初代所長 松前重義）
- 1969年 芸術研究所設立（初代所長 松前重義）
- 1982年 法学研究所設立（初代所長 松前重義）
- 1988年 基礎社会科学研究所、法学研究所を統合して社会科学研究所設立（初代所長 白鳥 令）
- 2001年 文明研究所、社会科学研究所、芸術研究所を統合して新文明研究所設立（初代所長 松本亮三）

2013年度の研究プロジェクト

アイデンティティの多様性と共生（コアプロジェクト1）

近代の文明を構成してきた、国民、民族、人種といったアイデンティティを問い直す時期にきています。このプロジェクトでは、文明研究所の第4期研究プログラムのテーマである「対話と共生：創出すべき21世紀文明の構成原理」のためにその問題性と可能性を検討するものです。研究の初年度と第2年度は、沖縄の自治・独立運動、戦争のモニュメントと記憶、ユダヤ人と国民国家、在日ブラジル人の教

育、アフリカ正教会、外国人の参政権といったさまざまなテーマにおいてアイデンティティに関する問題がどのように出現しているかという問いを設定することから出発しました。プロジェクト3年目にあたる本年は、研究領域を組み換え、新しい所員の参加をえた上で、在日ブラジル人の教育、異文化対処能力の教育モデル、沖縄における儀礼と音楽といった現代の問題と、歴史研究としてはフランスの中世をロマネスク聖堂の増加の視点から、そして同じくフランスにおける19世紀以降の公教育における宗教教育に関する研究を実施しました。

グローバル化下での社会システムの変容と再構築（コアプロジェクト2）

情報通信技術の革新から始まったグローバル化は、21世紀に入り、経済活動の世界的連結を超えて、社会活動のあらゆる分野に影響をあたえています。先進国、新興国、途上国などの各国は、グローバル化下での状況の変化の下で、それぞれがもつ固有の問題への対応に迫られています。それぞれの国の状況の中で、グローバル化に対応する社会システムの変容を検討するのが、このプロジェクトの目標です。新興国については、インド農業における緑の革命と電力の関係に焦点をあてた研究を、先進国内における成長産業としての医療と社会保障制度の変化について、人口減少社会における都市と地域をめぐる社会システムの転換について検討を行いました。また、グローバル化と国際的制度改革については、EU通貨統合の評価について、またわが国のTPP加盟と国内産業調整の政策選択のあり方について検討を進めました。

震災復興と文明（コアプロジェクト3）

東日本大震災はその被災の範囲、深刻度において近年の災害の中でも現代の世代が経験したことのない大規模な自然災害であるだけでなく、われわれに現代文明のあり方を反省させる契機ともなりました。

「調和のとれた文明社会の創造」は本学建学の理念です。文明研究所は、この建学の理念に示されたテーマの研究に真正面から取り組むことを使命と考えています。当研究所は、東日本大震災が現代文明に投げかけた様々な問題を明らかにすることを目的に、震災発生直後の2011年4月から特別プロジェクト「東日本大震災と文明」を開始し、大震災とエネルギー政策のあり方、大震災と現代文明の脆弱性、復興過程での脆弱性の修復の可否などを検討してきました。

実質的に第3年度となる本年度は震災復興研究をコアプロジェクトに昇格させて、地域研究に重点を移し、進み始めた復興事業の内容を比較することにしました。また、国際的な漁業の集積としての漁港をかかえる地域と、高齢化人口減少が進み、もはや産業としての存続が難しい零細な漁港をもつ地域を

対比するなかで、文理融合的なアプローチによって持続可能な地域社会と復興政策のあり方を検討しました。

＜公募プロジェクト＞

本研究所は個別プロジェクトの一部を公募プロジェクトとして、広く学内から公募しています。公募プロジェクトは、3つのコアプロジェクトの研究テーマに密接に対応する研究であり、かつ研究実績、準備状況がすぐれていて、本研究所員の陣容を超えた研究分野の研究を広く学内に公募して選定委員会の下で審査して選定しています。2013年度は次の4件を選定しました。

●「災害と地域メディア・デザインへの市民参加（2）：記録保存とリスク・コミュニケーションに関する実践的研究」研究代表者・水島久光（文学部広報メディア学科・教授）

コアプロジェクト「震災復興と文明」に対応する公募研究で、昨年度採択を受けた研究を継承しています。第1に、震災から二年が経過し、メディアの課題は「情報の過剰と空白」「事実性と妥当性」「思考停止と過剰反応」から、「コミュニティの再生」「風化と日常化」「社会的合意の形成」に向かいつつある動向を整理しました。第2に、災害情報配信に際してのソーシャルメディア、スマートフォンベースのリスク・コミュニケーション・サービスシステムの構想を、神奈川県西地域を対象にまとめました。第3に被災地域への映像アーカイブの公開に関する実践研究を気仙沼市を対象に行いました。

●「日中関係の新たな構築：重慶市の視点から」研究代表者・高橋祐三（教養学部国際学科・准教授）

日本と中国の国家関係は、北東アジア地域での「成熟国家と新興国家の相克」の様相を呈していて、地域内リーダー国家としての地位をめぐる両方が立ち位置を見定められずにいます。しかし環境問題では、経験と技術を豊富に持つ日本と、工業立国として環境問題が多発する中国は、相互に共有すべき知見と技術が多くあります。また、経済面ではすでに日中間での分業関係が進んでいるにもかかわらず、

政治面での対立が様々な協力関係に齟齬をきたしています。とりわけ、歴史問題での認識の相違が大きな障害となっています。そこで、本研究は、環境問題、生産分業、歴史問題の専門家メンバーとして、日中間における歴史・政治・経済・環境分野における両国間関係の変容と再構築を総合的に模索し、新時代の日中関係を提言します。

●「イスラエルの広報外交における多様性と共生への試み～国家戦略としての性的マイノリティの権利擁護の意味」研究代表者・羽生浩一（文学部広報メディア学科・准教授）

本研究では、イスラエル政府が広報外交戦略の一環として重視する性的マイノリティ（同性愛者）に対する権利擁護への取り組みを取り上げ、次の三つの課題を明らかにしました。民族、宗教対立で国家を二分するイスラエルが、（１）ユダヤ教、イスラム教のどちらの宗教的にタブーとされてきた同性愛を政府が認め、同性婚も法的に認めるようになった過程をたどり、（２）なぜこの性的マイノリティに対する権利推進を政府の広報外交戦略のひとつとして重視しているのか、どのような効果を上げているのか、（３）以上を踏まえ、国内の多様性と共生のために、同性愛者への権利を国家が擁護することに、どのような意味を持ち得るのか。

●「EUにおける国際金融危機対策に関する研究：欧州域内金融協力に焦点を当てて」研究代表者・布田功治（政治経済学部経済学科・専任講師）

グローバル化のもとでの新しい国際金融危機対策のあり方について、EUの事例を分析します。近年の欧州危機から、従来のような各国ごとの危機対策はもはやその有効性を大きく低下させているというのが識者の共通理解です。そこで本研究では、対話と共生を理念とするEUという枠組みを通じて欧州諸国がどのような危機対策を共同で構築していくのか、その進展状況の実態を掘り下げ、望ましいあり方を論じます。

『文明』第18号（2014年3月公開）
内容のご紹介

巻頭言：対話と共生：創出すべき21世紀文明の構成原理（川野辺裕幸）

講演会：ウェーデンモデルは日本に適用可能か（藤井威）
外国にルーツを持つ子どもたちの今：子どもクラブ「たんぽぽ」の取り組みから（リリアン・テルミ・ハタノ）

アイデンティティの多様性と共生（コアプロジェクト1）：

ブラジル学校高校生のポルトガル語と日本語の作文力調査（小貫大輔）

八重山地方の祭祀と芸能：西表島祖納の節（シチ）祭（磯部二郎）

19世紀アルザスユダヤ人の同化と初等教育（川崎亜紀子）

中世期南フランスにおける歴史的文化的景観の復元と分析：Ardèche ならびにGard

（中川久嗣）

グローバル人材育成を目指す異文化対処能力の教育モデルの構築（松本佳穂子）

グローバル化下での社会システムの変容と再構築（コアプロジェクト2）：

EU通貨統合とグローバル化（川野辺裕幸）

インド電力部門改革に関する研究（福味敦）

グローバル化下での社会システムの変容と再構築：医療の産業化と社会保障の関係性に着目して（堀真奈美）

震災復興と文明（コアプロジェクト3）：

復興政策に見る制度改革の実現可能性：宮城県現地調査を中心に（川野辺裕幸）

漁村社会と水産商工都市の共存共栄策（杉本隆成）

公募プロジェクト：

震災とメディアとリスク・コミュニケーション：再帰的ソーシャル・デザインのためのアジェンダ（水島久光）

日中関係の新たな構築：重慶市の視点から（高橋祐三・磯部靖・佐野淳也・平川幸子）

イスラエルの広報外交による国家イメージの変革：性的マイノリティの人権問題をめぐって（羽生浩一）

EUにおける国際金融危機対策に関する研究：欧州域内金融協力に焦点を当てて（布田功治）

（東海大学文明研究所公式ホームページよりログイン）

講演会

文明研究所第29回講演会（2013年11月29日）

「AIDS 当事者のちからが社会を変える！ —ブラジルの当事者運動—」

ジョゼ・アラウージョ・リマ・フィーリョ先生

アラウージョさんは、ブラジルでたいへんよく知られたエイズ・アクティビストで、自身がHIVに感染していることからHIV感染者の自助グループに参加して、HIV感染者の「生き生きと生きる権利」を主張してこられた方である。1997年、ブラジルはすべてのエイズ患者に治療薬を無料で保障することを決めたが、その政策もアラウージョさんたちのグループのメンバーが「生きる権利」を求めて闘った法廷闘争の勝利の結果だった。この政策は当時世界をあっと言わせたが、エイズ治療の無料保障は、今日世界のエイズ政策のスタンダードとなった。

今回の講演では、ブラジルのHIV感染者たちがいかに力をあわせてお互いを励まし合い、差別・偏見を取り除くために闘ってきたか、そしてその闘いがいかにブラジルの社会を動かし、とうとう政府をも動かすにいったかの歴史を振り返っていただいた。

セックスやコンドームといったテーマをユーモアたっぷり、さわやかに語るアラウージョさんの講演は、学生たちにとってたいへん新鮮だったようである。28年前に初めて感染を知らされたというアラウージョさんは、世界のエイズ・アクティビストの中でももっとも「古株」の一人である。治療薬もない中一緒に闘った初期の仲間たちは、ほとんどが亡くなってしまったそうである。死んでいった仲間たちのためにも、いつまでも若い人たちにメッセージを伝え続けたいと話していた。

(小貫大輔)



文明研究所第30回講演会（2014年1月23日）

「英語言語のグローバル化」

アンドリュー・ウォルバート先生

シュタイナー教育という特別な教育法による学校が、世界には1,000校以上あるが、アンドリュー・ウォルバート先生は、それらの学校の先生たちに英語教育法を伝えてきた人気の「カリスマ英語教師」である。この講演会では、英語という言語がグローバル言語になった背景を話していただいた。

大英帝国、そしてアメリカ合衆国という国々が、数百年にもわたって世界を支配してきた…、という近代史の話を予想していたところ、何とや「そのような誰にでもわかる『外的』な話はさておき…」と、いきなりケルト人の支配した紀元前のヨーロッパに連れていかれた。グレートブリテン島がケルト人、ローマ人の時代をへて、ゲルマン諸族の侵略、ノルマン人の征服を受け、ジャンヌ・ダルクで知られるフランスとの百年戦争を戦った、という歴史を振り返りながら、「英語という言語が世界の言語となるために、もし『内的』な理由があったとするなら」と、歴史の偶然によって、「語形変化」をはじめとする煩雑なものが古英語からいかにそぎ落とされていったか、そのことによって、いかに「本質的なもの」だけを残した「飾り気のない無私の」言語が生まれるにいったかが語られた。

確かに、英語ほど「形式」ではなく「意味・内容」を伝えることに重点をおく言語はなかなかない。そのことが、英語という言語をグローバル言語たらしめている「内的」要因だというお話であった。

さらには、中英語からチョーサーを暗唱し、近代英語の原点としてのシェイクスピアを語り、2000年を90分で駆け抜ける、実にエネルギー溢れる講演であった。

(小貫大輔)



研究会

文明研究所第1回研究会(2013年6月18日)
「アベノミクスの効果とグローバリゼーション」
(コアプロジェクト2)
所長 川野辺裕幸 政治経済学部経済学科教授

文明研究所第2回研究会(2013年7月16日)
「日本におけるブラジル学校の役割について」
(コアプロジェクト1)
所員 小貫大輔 教養学部国際学科教授

文明研究所第3回研究会(2013年10月8日)
「震災とメディアとリスク・コミュニケーション」
(公募プロジェクト)
研究員 水島久光 文学部広報メディア学科教授

文明研究所第4回研究会(2013年11月5日)
『震災復興と文明』 (コアプロジェクト3)
「漁村社会の存続か水産都市の振興か」
研究員 杉本隆成 東京大学名誉教授、元東海大学
海洋学部教授
「震災復興と公共選択：宮城県」
所長 川野辺裕幸 政治経済学部経済学科教授

文明研究所第5回研究会(2013年12月10日)
「イスラエルの広報外交における多様性と共生への
試みについて」(公募プロジェクト)
研究員 羽生浩一 文学部広報メディア学科准教授

文明研究所第6回研究会(2014年1月7日)
「EUにおける国家金融危機対策に関する研究－
欧州域内金融協力に視点を当てて－」(公募プロジ
ェクト)
研究員 布田功治 政治経済学部経済学科講師

研究紹介

英語能力観の変遷と自動採点の可能性

松本佳穂子

東海大学外国語教育センター教授

I. 英語の能力とは？

英語教育、特にその評価を研究する者として、学内外、広くは様々な社会や国際的な場で英語使用やその教育が語られる際に、それぞれの立場の方々異なる英語能力観を持っているために議論がかみ合わないのがとても気になっている。最近では企業や教育機関が、TOEIC®を代表とする外部ペーパーテストの点数を教育の達成度や採用の基準とする傾向が強いが、一方で声高に語られるのは、「グローバル人材」として世界に発信ができ、国際的な場で議論・交渉ができるような能力である。そこに見られるのは、ペーパーテストで測定できるような受信的能力（リーディング、リスニング、文法、語彙などの能力）がそのまま発信的能力（スピーキング、ライティング能力）に繋がるという単直な思い込みである。

世界的に見ると、英語を含む言語の評価方法はその能力観と共に変遷してきているのだが、日本では受験競争による点数や偏差値の過信を通じて、長い間に「点数偏重評価」の傾向が根付いてしまっている。以下に簡単に英語の能力観とその測定方法の変遷をまとめるが、これは一般的な変遷であり、日本はそれにまだ追いついていないことを後に述べる。

1. 下位能力は個別であるという見方（1950年代まで）

この時代は俗にいう訳読式教授法の全盛期であり、各下位能力をバラバラにテスト(discrete-point test)してそれを足せば全体能力になると考えられていた。テストは殆ど受信的能力を測るインプット型で、アウトプット（発信）はひたすらオウムのように繰り返し練習・暗唱すれば身に付くものと考えられていた。Friesがその中心的推進者であった。

2. 下位能力を支える普遍的な能力があるという見方 (1960年代から80年代)

英語の全ての下位能力を支える普遍的な能力が存在するという考え方で、言語学的にはChomskyの影響が大きい。教育的には訳読式ではなく、実際のコミュニケーション能力として英語を教える新しい教育法 (Dell Hymesの影響が大きい) の発達にも支えられている。客観的・科学的測定の重要性から、個々の教師が恣意的に作るテストではなくTOEFL®などの「標準テスト」が画期的に発展した時代である。日本でもこの流れを受けて、今のセンター入試の前身である共通一次テストが導入された。この時代は授業では発信能力を教えるが、測定は標準テストによる受信能力のみという形が中心であった。

3. 下位能力間の関係を多様で多面的なものとする見方 (1990年代以降)

発信能力の測定に脚光が当たるにつれ、英語の下位能力の間には様々な多面的な関係があることが実証され、インプットとアウトプットを統合させた授業や評価 (現在のTOEFL-iBT®は統合スキルテスト)、長期的な形成的評価 (プロジェクト型評価やポートフォリオ評価などのプロセス重視型評価) が台頭してきている。2000年以降は、北米の計量心理学的評価の伝統に対して、ヨーロッパのCEFR (ヨーロッパ共通言語基準枠) に基づく質的な基準や評価方法が注目されるようになった。

日本の状況はこれら世界的な能力観とテストの発達・変遷の一部をパッチワークのように都合よく取り入れながら来ており、根本的な発想の転換を伴う改革は行われてきていない。よってペーパーテストの点数への過信は変わらないまま、中学校・高等学校の指導要領は受信と発信を組み合わせた統合型に変わるといっただけで十分な状況を生んでいる。TOEFL®を初めアメリカ国内の様々なテストを作っているETSを訪問した時に、「TOEFL®をスキル統合型に

したことで、標準テストとしての信頼性は少し損なわれるが、本当に外国の大学で学習して行けるかという能力は測れるので妥当性は大きく向上した。」という話を聞いた。昨年グローバル人材の育成のためにTOEFL-iBT®を大学入試に使うのはどうかという極端な提案が文部科学大臣などから出て世間を騒がせたが、中等教育をスキル統合型にしたということに対して方向性だけは合っている。「測定したい或いはすべき能力を測定する」ということが妥当性の基本的な考え方であるが、海外の大学で勉強できるような英語力と日本の大学の求める英語力の乖離と難易度を全く無視した提案であった。日本のセンター試験にはやっとリスニングが加えられただけの状態なので、他国のテストを借りてしまおうという短絡的な考え方がうかがえた。

リスニング能力は他の下位能力と比較的によく相関しているという結果が報告されているが、ETSの世界的に集積されたデータからの相関報告を表1に示す

		リスニング・セクションとの相関
TOEFL®	リスニング・セクション	-----
	文法セクション	0.635
	リーディング・セクション	0.672
TWE® (ライティングテスト)	ライティング	0.571
TSE® (スピーキング・テスト)	発音	0.601
	文法的正確さ	0.644
	流暢さ	0.588
	全体の構成	0.647

表1. リスニング力と他の下位能力との相関

(De Mauro, 1992)。TWE®、TSE®というのは、TOEFL®がスキル統合型になる前に存在したライティングテストとスピーキングテストである。この相関をどう見るかには解釈の差があるとは思いますが、リスニングと発信能力との相関は決して高いとは言えないと思う。それでも全国の大学入学志望者の運命を決めるセンター試験が測定する能力にリスニングが加わったことは進歩であった。

発信能力の測定を標準テストに加えるには様々な障害とコストを伴うが、韓国では外注のテストセンターを使うスピーキング・テストを大学入試に加えることが現実的に考えられている。

II. 点数過信の問題点

テスト分野で重要とされる概念は信頼性、妥当性、実現可能性である。ただ、日本人の中に根付く点数信仰はそういう議論以前の問題を含む。一例を挙げてみよう。同じテストを受けた点数において10点差がある3組のペアがいるとする（20点と30点、50点と60点、80点と90点の3組のペア）。この10点差について、数字を目の前にすると私たちはつい同じくらいの能力差と受け取ってしまうが、本当にそうであろうか？もしそのテストが易しいテストであれば、低い点数の受験者をより弁別するであろうし、非常に難しいテストであれば能力の低い受験者はかなり「当て推量」で答えるであろうから、下位レベルでの10点差は意味がないかも知れない。

そういう問題を解決するためにテストの世界では真の能力値、各項目の難易度・弁別力を測定する「項目応答理論 (IRT)」が使われているが、そういう精緻な分析にはデータが必要なので、1回だけ使用され項目バンクを作らない現在のセンター入試や各大学の入試には適用できない。そうすると、各大学が合否の切り点としている点数（素点）の信頼性には疑いが持たれ、更にそういう判定方法が「点数の神話」を蔓延させてしまう。

つまり今の日本の英語能力の評価は、こういう素点への過信に加えて、発信能力を目標に謳いながら受信能力の評価のみに頼っているという問題を抱えている。

III. 発信能力測定の難しさ

発信能力測定の難しさには2つの側面がある。一つは話す・書くというコミュニケーション自体の多面性、もう一つは実現可能性に関するリソースとコストの問題である。

「書く・話す」という発信、即ち自己表現をするためには、まず「読む・聴く」ことによって受信した情報を解釈・判断・分析し、それに基づいて自らの考えを論理的に構築・表現することが必要である。つまり一般的な認知能力や問題解決能力が構成要素として関わってくる。それは、学習者が単純で定型的なコミュニケーションから、より複雑で専門的なもの（プレゼンテーション、専門文書の作成、会議でのディスカッションや交渉など）の習得を目指すにつれて、より必要になってくる能力でもある（図1参照）。現実の社会の仕事の場で、よく「TOEIC®が高得点だから採用したのに英語で議論もできないし、電子メールもろくに書けない」などと言う声が上がってくるのはある意味で当然なのである。

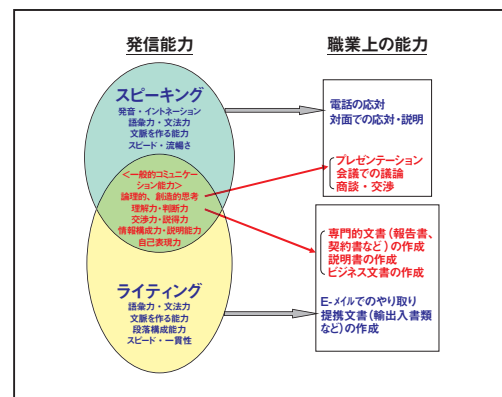


図1 学校で学ぶ発信能力と職業上の能力の関係

測定対象を基本的なスピーキング能力・ライティング能力に絞っても、スピーキング能力には、発音・流暢さ・正確さ・適切な表現使用・自然なディスコースの流れなどの多様な側面があり、ライティングも同様である。更にどのような風に話すか、書くかという問題は、状況やジャンルに依存しており、自らの発信であるが故に、適切な内容・構成・表現を状況の要求に合わせて選択して行く行為自体が非常に認知的に複雑なものである。

もう一つの問題はリソースとコストに関するものであるが、それもスピーキング能力とライティング能力が非常に多面的かつ複雑であることに関係している。通常、こういう発信能力のテストは人間の評価者が採点するため、多大な人的・時間的リソースとコストがかかる。更に発信能力の多面性故に評価が揺れるため、評価者のトレーニング、採点結果の合議・再検討なども必要になる。現在のスキル統合型のTOEFL-iBT®の受験料が2万円近いのはそのためであり、一般的にスピーキングやライティング・テストの受験料は高い。

IV. 自動採点の可能性

発信能力の測定の必要性は認識しながらも、なかなかそこに踏み出せないのは上記のような問題があるからであるが、それを解決する鍵になるかも知れないのが自動採点の可能性である。

ライティングの自動採点はほぼ実用化の手前まで来ている。筆者がよく授業や研究に使っているのは、上記ETSが開発した自然言語処理によるCriterion®というオンライン採点システムである。ジャンルの問題はあがるが、一応内容と表現以外の、構成・ディスコース・文法・スタイル・句読点法などの間違いをかなり正確に指摘し、過去に集積された同じトピックやテーマの作文と比較して総合点を出してくれる。

Criterion®は外国語として英語を学ぶ学習者向けの採点システムであるが、アメリカでは人口知能や意味関連分析などに基づいた一般向けの自動採点システムや評価ソフトウェアが既に中等学校や職場でも使用されている。ETSでは、現在自動採点と人間の評価を組み合わせた採点を行っていると聞いている。

コンピュータによる自動採点にはまだまだ不十分などころはあるが、筆者は自動採点システムを使うことによって、教員が作文の細かい添削にかかる時間や負荷を軽減し、もっと重要な意志の疎通に関わる側面である内容や構成の指導に時間と労力を傾けられると考えて、自動採点システムを組み込んだ授

業モデルの試行を続けている。また、自動採点システムはかなり教育的フィードバックを返してくれるので、学生が自律的な学習者になることにもつながる。

一方スピーキングの自動採点の方はあまりにも評価点が多面的で状況依存度も高いため、ジャンル・場面・状況を非常に限定した形で開発が進んでいる。

もし自動採点によって発信能力がある程度正確に測定できるようになれば、TOEFL-iBT®のような難易度の高すぎる高額な試験に頼らなくても、それぞれの教育機関と環境に合った発信能力測定ができるようになるであろう。

V. 終わりに

指導と評価は表裏一体であるべきなのだが、現在の日本の状況では中等教育で教えていること、高等教育で目指していることがきちんと妥当性をもって評価されていない。まず過剰な点数評価への依存から教育者と学習者を解き放ち、もっと将来につながる教育的な評価ができるよう、今後も授業をベースにした評価に関する研究とその発信をして行きたい。

ロマネスクの回転する渦巻きと 核エネルギー —南フランスの原発をめぐって—

中川 久嗣

文学部ヨーロッパ文明学科教授

南フランスのプロヴァンス地方のすぐ北のローヌ川西岸、アルデッシュ県のほぼ中ほどに「クリュアス」（またはクリュア、Cruas）という街がある。ローヌ川沿いに県道86号線をクルマで走ると、あっという間に通り過ぎてしまうような小さな街である。しかしクリュアスは、街の中心に、見事なロマネスク聖堂が残っていることでよく知られる。アルデッシュ県（ヴィヴァレ地方）の中では、おそらく最も規模が大きくて、しかも保存状態がよいものである。クリュアス大修道院附属サント・マリー教会（Abbatiale Sainte-Marie de Cruas、写真1）という。



（写真1 クリュアス大修道院附属サント・マリー教会）

その歴史は古く、もとは9世紀初め頃にベネディクト派の修道院が作られたことから始まる。現在見られるロマネスク教会は、その後11世紀から12世紀にかけて建て直されたものである。教会の東側には後陣の上にロンバルディア帯で装飾された2段構えの円形の頂塔が立つ。地上からのその高さにもか

かわらず、南北のトランセプトが巨大で長いことから、全体として非常に安定感を感じさせるものとなっている。半円形の後陣の左右両側には、やはり半円形の小後陣が並び、そのすべてにロンバルディア帯がつけられている。一方、西ファサードの上には5段構えの方形の鐘楼が立っている。教会の北と南の外壁上部はやはりロンバルディア帯で装飾されている。

このサント・マリー教会をいっそう魅力的なものにしているのは、その内部である。まず西のポルタイユ（扉口）から入って奥の4番目と5番目のスパンに12世紀のトリビューンがある。このトリビューンを支える15本の小円柱に施された柱頭彫刻は、保存状態もよく精緻である。下から吹き上がる植物の葉、ツル草文様、エサをついばみ羽根を広げる鳥たち、両耳を蛇にかまれた人物の顔、パルメット、ライオン、そしてローヌ川の水運を連想させる船のロープ様の装飾など。またヴォールトのリヴの交差部には、やはりライオンやパルメットが彫られている。

そのトリビューンの東には有名なクリプト（地下礼拝堂）がある。このクリプトの柱頭彫刻は、11世紀から12世紀にかけてのもので、非常にシンプルな形状とシンボリックなモチーフが、プレ・ロマネスク的な古さを感じさせる。中央に星（または花）を持つ円環、植物の葉に囲まれた車輪、回転する渦巻きの輪、イヌのような獣、ニワトリ、「オラント」（祈る人）など。とりわけ渦巻き状の円環（写真2）には、神学上の教義以前の、自然や大地の大いなるエネルギーや、あるいは動き始めた時の流れの力強さ、といったもの感じとることができる。

しかしこのクリュアスは、千年前のロマネスクとともに、いやそれ以上に、現代のエネルギーの象徴である原子力発電所があることでもよく知られる（写真3）。クリュアスにおけるロマネスクと原発のこの奇妙な共存は、最近ネットの世界などでもしばしば指摘されたりしている（注）。クリュアス原発は、約150ヘクタールの敷地面積を持ち、1984年からの稼働で、4基の原子炉を持つ。ローヌ川からの水を利用した4つの巨大な冷却塔がもくもくと水蒸気を排出する姿は、南仏に向かう新幹線（TGV）からもよく見える。その場所は、サント・マリー教会から南にわずか1.5キロだ。そう言えば、さきほど

触れたこのサント・マリー教会地下クリプトの、回転する渦巻きの輪を表した柱頭彫刻は、まるで原子核とそこから無限に放出される核エネルギーのようではないか。もちろんこの彫刻を彫った中世の人々はそんなことは考えもしなかっただろうが、1.5キロしか離れていない原発のことを肌で感じると、おかしな話だが、どうしてもそんなふうに見えてしまう。そしてまた、もしもクリュアス原発で大事故が発生したら、へたをしたらこの先何百年にわたって、このすばらしいサント・マリー教会は訪れることが出来なくなるのではないかと想像してしまう（ワインのコート・デュ・ローヌだって飲めなくなる）。しかし実はこの何年かの間だけでも、放射性物質が少し漏れるといった事故が実際にクリュアス原発でも起こっているのである。



(写真2)

アルデッシュ県をはさんでローヌ川の東のドローム県にも、やはり保存状態の良い見事なロマネスク様式のレオンセル修道院とその附属教会がある。この修道院はシトー派が創建したもので、附属教会の建築自体は12～13世紀のものである。西ファサードはシンプルであるが、中の身廊は、尖塔形の大アーケードと、そのアーケードの途中から付けられた装飾的な円柱の上に交差ヴォールトが連続する。また外部は多角形の大きな後陣とその両側に半円形の小後陣が並び、身廊部の東壁（後陣の上）にはシトー派によく見られる大きな円形の窓が付いている。さらにまたその上に二層からなる鐘塔が載り、全体として非常に美しいシトー派独特のプロポーションを保っている。ところで、東日本大震災があった2011年の夏にここを訪れた時、修道院のガイドのマダム

と、どういうわけか5ヶ月前の震災の話になり、「日本は地震がすごく多いのに、あんなにたくさん原発を作っちゃダメじゃないの」としかられたことがあった。「それじゃあ、原発大国のフランスは大丈夫なのですか」と尋ねたら、彼女は「フランスは日本ほど地震はないし、技術もしっかりしていて大丈夫よ、何の問題もないわ」と自信満々に答えていた。しかしそのわずか2週間後、ローヌ川下流プロヴァンス地方、オランジュの近くにある原子力発電関連施設マルクール放射性廃棄物の処理センターにおいて、死者まで出すような爆発炎上事故が発生した。フランス国内でもこの事故はかなり問題になった。あの自信満々のレオンセル修道院のマダムは、その事故のニュースを、いったいどのような気持ちで聞いたであろうか？

「フクシマ」をみずから経験した私たち日本人には、もはやそのような楽天的な自信を持つことはできない。何の根拠もなく単純に、原発のことを大丈夫だと思い込むことももはや許されない。あるいは、あえて見ないふりをして大丈夫だと思い込もうとすることも許されない。南フランスの何百年も昔のロマネスク教会を巡っていて、はからずもこうした思いを新たにするのである。



(写真3 クリュアス原子力発電所)

(注) 例えば日本語のものでは、佐藤純氏のブログ「ロマネスク教会と原発」

(<http://photoletterparis.seesaa.net/article/282980175.html>、2014年1月参照) など。

なお、写真1～3は、すべて中川が撮影。

所員の活動

磯部二郎

教養学部芸術学科音楽学課程 副主任教授



【執筆・翻訳】

- 「八重山地方の祭祀と芸能—西表島祖納の節（シチ）祭—」 『文明』 18号（掲載予定）

【その他の活動】

- 「東海大学教養学部芸術学科音楽学課程ヴィオラ・ダ・ガンバ定期演奏会」 特別友情出演（海老名文化会館小ホール） 2013年11月27日
- 「東海大学教養学部芸術学科音楽学課程第43回定期演奏会」（神奈川県立音楽堂）の企画・運営 2013年12月20日
- 「東海大学教養学部芸術学科音楽学課程2013年度卒業演奏会」（神奈川県立音楽堂）の企画・運営 2014年2月18日

小貫大輔

教養学部国際学科 主任教授



【執筆・翻訳】

- 「ブラジルの市民社会と日本のブラジル学校」 東海大学教養学部国際学科編『第4版国際学のすすめ』 東海大学出版会 2013年10月
- 「多文化子どもプロジェクトの歴史」 『東海大学教養学部紀要』 2014年3月
- 「愛と信頼—大学生に伝える授業」 近藤卓編著『基本的自尊感情を育むいのちの教育—共有体験を重視して』 金子書房 2014年3月

【報告・講演】

- “Teaching the Brazilian kiss to Japanese college students - and shaking up their culture”（日本の大学生にブラジルのキスの挨拶を教える～そして文化を揺すぶる） The 21st Congress of the World Association for Sexual Health（第21回世界「性の健康」学会）にて招待講演（ポルトアレグレ/ブラジル） 2013年9月
- 国連人口基金公開シンポジウム「母親になる少女—思春期の妊娠問題に取り組む」にてパネリストとして発表（国連大学） 2013年11月

【その他の活動】

- 「マルチカルチャー・キャンプ」開催（岐阜、北海道） 2013年6月、8月

川崎亜紀子

文学部歴史学科西洋史専攻 准教授



【執筆・翻訳】

- 「アルザスユダヤ人再考—セール・ベールの活動を中心に—」 谷澤毅他編『地域と越境—「共生の社会経済史」』 春風社、2014年3月

【報告・講演】

- 「19世紀前半のアルザスユダヤ人における初等教育」日本ユダヤ学会（早稲田大学） 2013年10月
- 「19世紀アルザスユダヤ人における教育と『再生』」 「歴史と人間」研究会（一橋大学） 2014年2月

川野辺裕幸

文明研究所所長 政治経済学部経済学科教授



【執筆・翻訳】

- 『テキストブック 公共選択』（共編著）勁草書房、2013年10月
- 「ヴァージニア学派の誕生」『公共選択』第61号 2014年3月
- 「規制改革を成長戦略に据え直せ」『改革者』第636号 2013年7月
- 「クールヘッド・アンド・ウォームハート」『改革者』第642号 2014年1月
- 「増収増分を先食いの経済政策パッケージ」『週刊 世界と日本』第2016号 2013年11月

【報告・講演】

- 「アベノミクスの効果とグローバリゼーション」東海大学文明研究所研究会（東海大学文明研究所） 2013年6月
- 「震災復興と公共選択：宮城県」東海大学文明研究所研究会（東海大学文明研究所） 2013年11月

小林 隆

政治経済学部政治学科 教授



【執筆・翻訳】

- 「ネット社会を生きる力」『日本教育』No.426 2013年9月
- 「ネット選挙に立ち塞がる高齢化」『自治日報』第3705号 2013年9月

【報告・講演】

- 「人口減少時代の議会と情報—ネット選挙解禁の意味」自治体議会政策学会第15期自治政策講座in横浜（神奈川県民ホール） 2013年5月
- 「ICTを活用した議会改革と議員活動の未来～ネット選挙の意義と役割～」山口市議会議員研修会（山口市役所） 2013年11月

中川久嗣

文学部ヨーロッパ文学科 教授



【執筆・翻訳】

- 『ミシェル・フーコーの思想的軌跡 —〈文明〉の批判理論を読み解く』（単著）東海大学出版会 2013年6月

【報告・講演】

- 「フランス・パリの歴史と文化」横須賀市市民大学講座（横須賀市生涯学習センター）
2013年11月、12月

福味敦

政治経済学部経済学科 准教授



【執筆・翻訳】

- 「電力セクターのゆくえ」水島司編著『激動のインド 第1巻 変動のゆくえ』（第10章を担当）日本経済評論社
2013年12月

【報告・講演】

- 「エコノメトリクスによるインド経済研究：現状と課題」現代インド南アジアセミナー（NIHUプログラム 現代インド地域研究）（東京外国語大学） 2013年9月
- 「インドの経済成長を考える」インド万華鏡—多文化・多民族・多宗教社会の諸相（大阪経済法科大学アジア太平洋研究センター・市民アカデミア） 2013年12月
- 「インド中央政府と州政府の財政について」財務総合政策研究所 第4回 インドワークショップ（財務省） 2014年1月

堀真奈美

教養学部人間環境学科社会環境課程 教授



【執筆・翻訳】

- 「医療保障と公共選択論」『テキストブック公共選択論』勁草書房2013年10月
- 「医療政策の価値規範」『公共政策研究』13号 2013年12月
- 「イギリスにおける民間医療保険の役割」『海外医療保障』98号 2013年6月
- 「NHS改革による地方自治体を基盤とする新たな地域保健体制の確立に向けて」、『公衆衛生』78（1）
- 「イギリスの医療制度改革はどこに向かうのか（2）～（12）」『文化連情報』2013年4月～連載中

【報告・講演】

- 「イギリス医療における公私役割の分担」日本医療・病院管理学会 2013年9月
- 「教育講座 社会保障制度改革—最新動向から何を読み取れるか」山陽新聞社2013年11月

【その他の活動】

- 「アメリカ及びイギリスにおける社会保障制度と会計検査に関する調査研究委員会」委員、会計検査院
- 「2020年代以降の超高齢社会における社会保障制度のあり方に関する研究会」委員、年金シニアプラン総合研究機構

松本佳穂子

外国語教育センター 教授



【執筆・翻訳】

- 「地域を巻き込む FD -英語教育お助けサイトの構築」『日本教育工学会研究報告集』第2号 2013年7月
- “Development of Instructional Models for Teaching Intercultural Communication to Japanese Students” *The proceedings of 18th Pan-Pacific Association of Applied Linguistics Conference, Section D2 in digital publication* 2013年8月
- 「異文化間能力の指標と指導モデル構築の試み」『文明』18号 2014年3月
- “The difference between monologue-type and natural conversation type speaking tests” 大学英語教育学会・テスト研究会編 *Studies on L2 Speaking: Teaching and Assessing* 2014年3月
- 科学研究費(基盤B)助成研究報告書「言語教育におけるクリティカル・シンキング能力に関する到達目標・評価基準の開発研究」大学英語教育学会・クリティカル・シンキング研究会編『クリティカル・シンキングと大学英語教育III』2014年3月

【報告・講演】

- “Teaching and Assessing Intercultural Communication with Critical Thinking in FL Classes in Japan”, 2013年度Cultnet国際大会にて一般発表(ダラム/イギリス) 2013年4月
- “Assessment Literacy: What Teachers Should Know When They Make a Test”, 第20回日本言語文化学会にて一般発表、(大妻女子大学) 2013年5月
- 「効果的な英語プレゼンテーションとは? - 重要な要素と必要なスキル」財務省財務総合政策研究所国際交流室主催第21回財政経済セミナーにて招待講義 2013年5月
- “What Makes Your Presentation in English More Effective? - Important Factors and Necessary Skills” 財務省主催2013年度中央アジア・コーカサス夏期セミナーにて招待講義 2013年8月
- “Developing an effective questionnaire to investigate learners’ multilayered structure”第18回『環』太平洋応用言語学会にて一般発表(共同)(スウォン/韓国) 2013年8月
- 「異文化対処能力及びクリティカル・シンキング能力の指標と教授モデル構築の試み」、第39回全国英語教育学会にて一般発表(共同)(北星学園大学) 2013年8月
- 「リベラル・アーツ型初年次教育の可能性」第55回日本教育心理学会におけるシンポジウム『コミュニケーションスキルの習得を目指した初年次教育』の中で発表・討論(法政大学) 2013年8月
- “Ideas for Integrated-Skills Assessment”第52回大学英語教育学会国際大会におけるシンポジウム“Integrated-Skill Teaching and Integrated Assessment: The Interface between Teaching and Testing”の中で発表・討論(京都大学) 2013年8月
- 「東海大学必修英語カリキュラムを支えるCan-doリストの構築と実践状況について」2013年度慶應義塾外国語一貫教育フォーラムにて招待講演 2013年9月
- 大学英語教育学会テスト研究会主催第6回サマールワークショップにて「技能統合テスト作成方法」を担当(慶應義塾大学) 2013年9月
- “Creation of a Framework for Teaching Intercultural Communication to Japanese University Students”, 第11回Asia-TEFL国際大会にて一般発表(共同)(マニラ/フィリピン) 2013年10月
- “The Analysis of Consequences of Increasing ‘English-only’ Trend in the Japanese Workplace” 第12回IALIC国際大会で一般発表(香港/中国) 2013年11月
- “Anthropological Analysis of ‘Good’ Learners of English” 第12回IALIC国際大会で一般発表(共同)(香港/中国) 2013年11月
- “Development of a Framework and Instructional Models for Teaching Intercultural Communication in English Classes”, 第10回CamTESOL国際大会で一般発表(プノンペン/カンボジア) 2014年2月
- “Analysis of Descriptions in Autobiography of Intercultural Encounters using KH Coder”, 第25回SITE国際大会にて一般発表(共同)(ジャクソンビル/アメリカ) 2014年3月

【その他の活動】

- 大学英語教育学会学術出版物選考委員会委員、及び関東支部紀要査読委員
- 大学英語教育学会関東支部研究企画委員、及びクリティカル・シンキング研究会副代表
- 日本語テスト学会紀要委員会副委員長
- 日本教育工学会論文誌査読委員
- 「大学英語教育学会テスト研究会主催第6回サマールワークショップ」(慶應義塾大学)企画・運営 2013年9月
- 「大学英語教育学会クリティカル・シンキング研究会主催シンポジウム」の企画・運営(東海大学高輪校舎) 2014年3月



東海大学文明研究所所報 2013

発行人 川野辺裕幸

発行日 2014年3月31日

発行所 東海大学文明研究所

神奈川県平塚市北金目 4-1-1 〒259-1292 tel:0463-58-1211 ext.4900~4902 fax:0463-50-2050